平成28年度　山口県立下関南総合支援学校　学校評価書　　校長（大野　浩光 ）

1　学校教育目標

(1) 個性豊かに持てる力を十分に発揮する、活気あふれる学校　≪学校≫
(2) 健やかな身体と思いやりの心を育む、笑顔あふれる学校　≪楽校≫
(3) つながりと協調の心で家庭や地域社会の信頼に応える、親しみあふれる学校　≪合校≫

2　現状分析（前年度の評価と課題を踏まえて）

総合支援学校となったことにより、これまで以上に多様な障害やニーズへの対応が求められるようになり、視覚障害教育の専門性を継承しつつ各障害に対する教職員の専門性を高めていくことが重要である。しかし、幼児・児童生徒への対応におわれ、そのための研修を行う時間の確保が課題となっている。その課題解決のために、学部及び分掌間の連携強化や情報共有を密に図りながら、組織的な取組を強化するとともに、中四盲研の研究発表に向けての研修を通して児童生徒一人ひとりの教育的ニーズに応じた教育活動を推進する。
また、今年度新設された教育相談部と他の分掌業務も含めて、組織的かつ円滑な学校運営を行うことができるよう取組を進める。

3　本年度重点を置いて目指す成果・特色、取り組むべき課題

＜チャレンジ目標＞　笑顔で元気よくあいさつ
○　視覚障害教育センター・聴覚障害教育センター的機能の充実
○　一人ひとりの実態に応じた教育内容の充実
○　障害の実態に即した幼児児童生徒の安心安全な教育環境の整備
○　障害の多様化に対する教員の専門性の向上
○　協働性・同僚性による学校の一体感の醸成
○　一人ひとりの自立に向けた力を伸ばす授業力の向上
○「つながり」を重視した教育活動の推進

4　自己評価

領域評価	重点目標	具体的方策（教育活動）	評価基準	達成度	重点目標の達成状況の診断・分析
総務	○学校Webページの充実	・必要な情報や活動を提供するため、こまめに更新する。	4　年間更新回数　80回以上 3　年間更新回数　70回以上 2　年間更新回数　60回以上 1　年間更新回数　50回以上	3	・特に、ブログの更新について、1週間に1回程度のペースで、各学部・学科がローテーションを行い更新することができた、幼児児童生徒の活動の様子をこまめに紹介することができたため、「分かりやすくなった」などの感想もあった。今後は、ブログのみだけでなく、各校務分掌からのお知らせなども更新できるようにする。
教務	○ 多様な障害の状況に対応した指導支援の充実	・幼児児童生徒の実態に応じた教育課程を編成する。	4　十分達成できた。 3　達成できた。 2　やや不十分であった。 1　不十分であった。	3	・アンケートの結果では「はい」「どちらかといえばはい」が教員約96%、保護者約95%、児童生徒約97%となっている。これらは前年の数字に比べてもそれぞれが向上しており、幼児児童生徒の実態に応じた指導の成果が上がっているものと考えられる。
		・昨年度に引き続き幼児児童生徒が使いやすい図書室の設備環境を整える。	4　十分達成できた。 3　達成できた。 2　やや不十分であった。 1　不十分であった。	4	・幼児児童生徒、教職員の要望をもとに蔵書の充実を図った。バーコードリーダーを導入し、書籍の貸し出し、返却の管理をしやすくした。アンケートの集計結果では、児童・生徒約　92%、教職員約97%が使いやすくなったと答えており環境整備の成果があったと思われる。
生徒指導	○学校行事の充実と登下校時の安全指導	・行事の内容を提示し、幼児児童生徒の実態を踏ま えた上で、事前に幼児児童生徒の意見が反映されるような仕組みを構築する。	4　十分達成できた。 3　達成できた。 2　やや不十分であった。 1　不十分であった。	3	・選挙管理委員会の見直しなど、委員会活動を活性化させることで、児童・生徒の意見をより一層活かしていく。
		・年間計画だけでなく、通学路での街頭指導を随時実施し、交通安全意識の向上を図る。	4　充分に実施できた。 3　年間計画は達成できた。 2　年間計画を達成できなかった。 1　充分に実施できなかった。	4	・年間行事を考慮した指導計画を立て、無理なく指導が行えるよう工夫する。 ・登下校時の立哨やバス、JR通学生の見守りなど、細やかな配慮を実施している。
保健安全	○心身の健康の保持増進と安心安全な生活環境の維持	・危機管理マニュアルを活用し、より具体的な避難訓練を実施することで緊急時対応の体制を整える。	4　十分達成できた。 3　達成できた。 2　やや不十分であった。 1　不十分であった。	3	・今年度は大規模災害等発生時における幼児児童生徒の保護者への引き渡し避難訓練を実施することができた。今年度の反省等をもとに、危機管理マニュアルや避難訓練の方法を改善し、安心安全な学校づくりの推進を図っていきたい。
		・幼児児童生徒の体力づくりのために、授業をはじめ、部活動や各種スポーツ大会への参加を呼びかけ、外部とのつながりを持ちながら健康への意欲を高める取組をする。	4　十分達成できた。 3　達成できた。 2　やや不十分であった。 1　不十分であった。	3	・今年度も幼小学部では運動会を実施した。小・中学部では、持久走大会を実施し、授業での取組の成果を発揮することができた。また、部活動では、陸上競技・STTなどの活動を促進したことにより、多くの生徒が大会への参加をし、活躍することができた。今後は対象児童生徒の枠を広げ、校内で一貫指導ができる体制づくりをしていきたい。
進路	○キャリア教育の充実	・幼児児童生徒の障害の多様化に伴い、一人ひとりの障害実態や発達段階に応じたキャリア教育を推進する。	4　十分達成できた。 3　達成できた。 2　やや不十分であった。 1　不十分であった。	3	・アンケートの結果や保護者からの意見、質問等から、保護者や教職員のキャリア教育に関する意識は着実に高まってきている。今後も児童生徒の個々の状況をよく把握し、それぞれのニーズに合わせたキャリア教育を実践していきたい。
		・将来の就労に結び付く実践的な授業（作業学習）や生活自立を踏まえた現場実習を実施する。	4　十分達成できた。 3　達成できた。 2　やや不十分であった。 1　不十分であった。	3	・保護者および教職員対象のアンケートでの類似の質問の結果では「はい」「どちらかといえばはい」を合わせた数が全体の約87%であった。今年度の進路に関する最終的な結果はまだ出ていないが、現場実習や作業学習等将来の就労をふまえた実践は少しずつではあるが充実したものになってきている。今後はハード面の充実を含めさらに検討していきたい。
研修	○障害の多様化に対応した研修・研究の充実	・様々な障害に関する校内グループ研究を行うとともに、手話講習会やミニ研修会、外部講師による研修会を企画し実施する。また、研修出張の復伝会やグループ研究の発表会を実施することにより、全校での情報の共有に努める。	4　年間25回以上実施できた。 3　年間20回以上実施できた。 2　年間15回以上実施できた。 1　年間15回未満であった。	3	・本年度は、昨年度の学校評価で次年度への改善策として挙げた「外部講師による研修会」を「合理的配慮について」というテーマを設定して夏季休業中に実施した。 　また、8月に主管校として本校を会場に行った「中国・四国地区盲学校教育研究大会」では、他県の様々な取組や新しい情報を知ることができた。 ・昨年度からの継続した取組としては、毎月1回の研究日を設定して9つのグループで取り組んだ校内グループ研究（3月に校内研究発表会を予定）、点字研修会、手話講習会、研修出張の復伝会、研修会・研究会のお知らせ等が挙げられる。 ・研修の回数としては評価基準3を満たしているが、今後さらに研修の充実に向けて内容や方法について検討しながら取り組んでいきたい。
教育相談	○連携に基づいた体制作りと相談活動の充実	・幼児児童生徒、保護者、教職員、関係諸機関と連携しながら、相談体制の整備を行い、 相談活動やいじめ対策の充実及び活動内容の周知を図る。	4　十分達成できた。 3　達成できた。 2　やや不十分であった。 1　不十分であった。	3	・アンケートの結果、児童生徒の91%、保護者の93%が「はい」「どちらかといえばはい」を回答しており、必要なときに教育相談を受けることができる体制が整ってきたと考えられる。また、教職員の87%が「はい」「どちらかといえばはい」を回答しており、教育相談活動の充実を図ることができたという評価であった。 ・学校や学部内での情報交換を図り、今後とも学部内や、学校全体の情報共有のありかたを検討していく必要があると思われる。
視覚障害センター教育室	○ 校内外における視覚障害理解の推進	・視覚障害教育に関する研修や対象幼児児童生徒への支援を担当者と協力して行う。 ・県内地域コーディネーターや校内コーディネーターとの連絡を密にし、対象幼児児童生徒の在籍する学校との連携を図る。	4　十分達成できた。 3　達成できた。 2　やや不十分であった。 1　不十分であった。	3	・校内における視覚障害教育に関する研修では平均20名余りの教員が参加した。研修内容は毎年少しずつ内容を変え、日々の指導に役立つ内容も入れていった。視覚障害幼児児童生徒の担当者との連携ではセンター室教員の直接指導も行ったが、担任や担当者が継続して指導できるような方策を考えていきたい。 ・県内地域コーディネーターと同行した要請訪問や西部地域の巡回訪問や要請訪問で視覚障害幼児児童生徒の在籍する学校との連携を図り、相談支援活動を充実させることができた。地域の学校での支援委員会の参加等、専門家チームとしての役割を果たすことができた。
聴覚障害教育センター室	○聴覚障害教育に関する相談・支援体制の構築	・聴覚障害教育センター独自のリーフレットの作成及び配布、活動内容のホームページへの掲載、聴覚障害教育関係機関連携協議会の開催等を通し、本センターの活動について理解促進を図る。また、各関係機関と連携を図り、それぞれの実態に応じた支援を実施する。	4　十分達成できた。 3　達成できた。 2　やや不十分であった。 1　不十分であった。	4	・聴覚障害教育センター独自のリーフレットを作成し、6月に各市の関係機関にポスターと共に配布した。 ・6月に山口県西部地域聴覚障害教育関係機関連携協議会を開催した。4市の医療、福祉、教育に関わる機関の担当者と顔合わせをし、情報交換を行った。今回は、特別支援学級に在籍する子どもの支援のみならず、通常学級に在籍する聴覚障害のある児童生徒への支援の必要性について共通理解することができた。 ・8月に行った聴覚障害指導担当教員連絡協議会には、専門家チームの1名を含め4市11名の参加があり、各学校の支援体制や自立活動の取り組みについて情報交換し、担当者同士の横のつながりを作ることができた。 ・難聴特別支援学級（9校）への巡回訪問を1校につき2回実施し、ケースに応じた支援方法や支援体制づくり等に関するアドバイスを行うことができた。また、各校の支援の充実を図るため、各市の教育委員会担当者に訪問の報告を行った。 ・定期相談来校児の相談実施状況について報告書を作成し各在籍園・校に送付したり、校内コーディネーターや担任と直接話をしたりして支援の充実を図った。
	○校内支援体制の充実	・ 個の実態や必要に応じ聴覚管理や発音明瞭度検査等を実施する。また、聴覚障害のある幼児児童生徒に対する情報保障の必要性を校内に周知し、各分掌・係と連携を図りながら学校行事における情報保障を実施する。	4　十分達成できた。 3　達成できた。 2　やや不十分であった。 1　不十分であった。	4	・聴覚管理については、聴力測定、補聴器の点検及び修理、イヤモールドの作製及び装用、聴力低下、福祉の手続きに対応した。（2学期末現在：16名、127件） ・聴覚管理に関することは、耳鼻科医、担任、保護者、補聴器業者と連携し実施した。 ・幼稚部の来年度インテグレート児に対する支援の充実を図るため、市教委、就学・就園予定先の学校や園に対し子どもの実態や支援方法等の情報提供を行った。 ・ほとんどの学校行事で情報保障を行った。また、今年度は、データの提出をお願いするため、行事の1週間前に全体に呼びかけを行ったり、センター室では対応できない情報保障を各担任の先生にお願いしたりした。これらのことから、情報保障の意識が教職員の中に定着してきたように思われる。 ・2月に発音明瞭度検査を実施し、来年度の発音指導に生かす予定である。
寄宿舎運営	○舎生の実態に応じた支援の充実	・ 指導員間で十分な共通理解を図り、学部や家庭と連携し支援を行う。	4　十分達成できた。 3　ほぼ達成できた。 2　やや不十分であった。 1　不十分であった。	3	・朝夕の引継ぎと会議、指導員研修会の中で舎生の様子、支援方法について話し合い、共通確認をしながら支援を行うことができた。必要に応じて学部や家庭とも情報交換を行い、ニーズや実態に応じた支援につなげることができた。 ・教職員アンケートでは、「指導員間で共通理解を図り、学部や家庭と連携して適切な支援ができましたか」の問いに40%が「はい」と答え、「どちらかといえばはい」を含めると100%が達成できたと回答した。
事務室	○障害の実態に即した幼児児童生徒の安心安全な教育環境の整備	・5障害に対応した安全な施設整備を行う。 ・送迎に支障をきたさないよう外壁改修工事を行う。	4　80%以上整備できた。 3　60%以上整備できた。 2　40%以上整備できた 1　20%以上整備できた。	4	・要望のあった施設整備・修繕について、概ね達成できた。障害者用トイレについては、今年度中に工事予定。 ・足場が一部通路部分に設置されたが、送迎用駐車スペースは確保された。また、送迎時に工事を中断するなどの措置により、特に混乱した様子は見られなかった。
業務改善	学校の組織等 ○学部間の連携を図るとともに、学部の特性を生かした学校行事の運営と学校全体の組織的な取組	・幼児児童生徒の交流を図るとともに各学部間の連携を密にし、幼児児童生徒の充実した学校生活を支援する。 ・各行事について意義や目的を見直し、より充実した活動ができるようにする。	4　十分達成できた。 3　ほぼ達成できた。 2　やや不十分であった。 1　不十分であった。	3	・学校全体が協力して取り組める行事については、各学部が連携し内容について検討することにより、今後も継続できるとよい。また、学部の特性を生かした各種行事については、詳細な計画に基づいて実施できるとよい。 ・授業時間確保等を考え、今後も学校全体、あるいは各学部で行事の運営や精選について検討していく必要がある。
	日常的な業務 ○日常の情報共有の徹底による学部間等の円滑な連携強化	・校内掲示板やメールの有効的な活用を目指す。	4　十分達成できた。 3　ほぼ達成できた。 2　やや不十分であった。 1　不十分であった。	3	・掲示板やメールは行き届くようになり、情報の共有も効率よくなされるようになってきている。教職員の意識をさらに高め、より効果的な活用を促し、学部内や学部間の連携の強化を図るようにする。
	勤務状況 ○ノー会議デーの実施	・毎週木曜日のノー会議デーの日に打ち合わせやミニ会議が実施されないようにする。また、ノー残業を呼びかける。	4　十分達成できた。（20回以上） 3　ほぼ達成できた。（15～19回） 2　やや不十分であった。（10～14回） 1　不十分であった。（9回以下）	3	・ノー会議デーを行事予定表や職朝等で周知し、ノー残業を呼びかけることが必要である。また、ノー残業の実施に伴い、負担増を感じている教職員があることが問題となっているので、改善策を講じる必要がある。